平成元年～5年

1989～1993

平成元年村制100周年を迎える

住民ら知恵絞り論議

上浮穴郡面河村はこのほど、村の活性化方策を探る「ふるさと創生塾」（村、商工会共催）を発足させた。一年間の予定で毎月二回の勉強会を開き、村民有志が知恵を絞っていく。

同村は人口千三百人足らずの過疎の村。農林業のほか面河渓や石鎚スカイラインなどの観光が大きな収入源。役場には「むらおこし対策課」を設置して産業おこしを図っているが、同塾は、さらに住民の意識を高め、有効な方策を探ろうと昨年十一月から発足した。（平成元年1月13日）

話し合いをする「ふるさと創生塾面河」の参加者

匿名の卒業生　本を寄贈

「読書の習慣をつけ勉強の好きな子になって」とこのほど、上浮穴郡面河村の幼稚園と小中学校に匿名の卒業生から本がプレゼントされ、子供たちを感激させている。

本を贈られたのは同村渋草の渋草幼稚園（増元晶尚園長、九人）、渋草小（同校長、二十九人）、面河中（三好次郎校長、三十二人）。今月中ごろ、中学の玄関に子供向きの四種類の全集（約四万円相当）が置かれていた。（平成元年6月23日）

贈られた本を前に、喜ぶ渋草小、面河中の子供たち

面河村で成人式

上浮穴郡面河村の成人式が一月三日、村住民センターで行われ、今年二十歳を迎える住人のうち男女五人が出席して村職員や来賓から祝福と激励を受けた。

出席したのは、村森林組合に勤務する一人と、村外で勉学中の四人。中川鬼子太郎村長が村の現状や事業を説明したあと「過疎の村だが、内容では他町村に負けていない。誇りを持って頑張ってほしい」と励ました。

各成人者が「看護婦を目指して頑張っている」「コンピューターの勉強をしている」「面河の林業のために頑張りたい」と抱負を述べ、中川村長が「保健婦の資格を取って村に帰ってきてほしい」「林業で注文があれば何でも言ってほしい」など話しかけながら記念品を贈呈した。

（平成2年1月7日）

成人の抱負を述べる面河村の若者たち

伝統のわら加工学ぶ

お年寄りの生きがいづくりを目的に昔の技術を習得する「くらしの伝承活動研究会」が七月二十四日、上浮穴郡面河村の住民センターで開かれ、村内のお年寄りが、わら加工に取り組んだ。

久万農業改良普及所が主催して昨年から続けている事業で、県内では三地区で実施している。同日は村内の各種の技術伝承者、老人クラブのリーダーらが参加。わら民芸品作りの名人の菊池一郎さん（七八）＝西宇和郡三瓶町、農業＝を講師に、ミニほご（かご）の作り方などを習ったあと、色紙掛けや草履を作った。

（平成元年7月25日）

わらの加工技術を学ぶ面河村のお年寄りたち

和やかに体験発表

お年寄りと婦人集い交流

上浮穴郡面河村で二月二十七日、農村社会の活性化を図る「農村高齢者・婦人交流集会」（久万農業改良普及所、村主催）が開かれ、技術研修、体験発表、講演が和やかに行われた。

県の農家高齢者能力活用推進事業の一環で、二年計画の二年目。年二回交流集会を行っており、同日は会場の住民センターに菅福定さんらお年寄りが三十人、高岡富佐子さんら生活改善グループの婦人が三十五人参加した。

（平成2年2月28日）

体験発表などが行われた面河村の交流集会

帰省家族加わり和気あいあい

敬老会兼ねて運動会

過疎、高齢化に悩む面河ダム湖畔の上浮穴郡面河村笠方で十月十日、敬老会を兼ねた運動会があり、地区民や帰省家族ら約百七十人が日ごろの沈滞ムードを吹き飛ばした。

四国山地のふもとにある笠方地区は昭和二十五年には九百四十一人の人口があったが、ダム建設（三十八年完成）による水没で三百八十人が離村、現在では九十六人になった。しかも、うち七十歳以上が二十五人、二十歳未満はわずか七人と高齢化が進み、平均年齢は六十歳を超えている。

運動会兼敬老会は「寂れゆく地域に活気を」と四十四年に始まり、今年で十二回目。

（平成2年10月12日）

面河ダム湖畔の笠方地区で行われた敬老会兼運動会

元気に炭焼きを続ける木下さん

こだわり人生　木下信義さん（七八）

炭焼き60年　まず窯造り

ガスや電気が燃料の主流となった昭和三十年ごろ以降、上浮穴郡の山のあちこちから炭を焼く煙が消えた。山では広葉樹が切られ、スギやヒノキに替わった。国有林が多く県内有数の木炭産地だった面河村でも、四百人近くいた炭焼きさんが今は六～七人に減ってしまった。専業は一人もおらず、農閑期の副業で細々と続けているだけだ。

木下さんと炭焼きの出合いは高小を卒業後、自宅の窯で手伝いだしてから。炭焼き歴は以来六十余年、村では最長老だ。昭和十四年から四十三年までは、県事務所の林産物検査員（面河駐在）として木炭や用材の検査にあたってきた。いわば炭焼きのプロである。焼き方だけでなく、炭窯の造り方も研究を重ね、村内をはじめ久万や松山でも指導してきた。「同じ人が同じ材料を使っても同じ窯はできません。満足いく窯ができるのは一割ぐらい。窯がボロかったら、いい炭はできん」

今の窯は三十年ごろのもので「まあまあの出来」。一回に約八立方メートルの原木を焼く。十日ぐらいかかって約四百キロの炭ができる。原木は自分の山のナラやケヤキのほか雑木。「よそから買うたんでは引き合いません」

品質は申し分ない。県内をはじめ遠く高松からもお茶の先生が買いに来る。ほかに「魚焼くのはやっぱり炭でないと」と村内の人らが買う。こたつにも使う。多いときは年十回ぐらい焼いたが、最近は年二～三回に減った。適当な広葉樹が残り少なくなったためだ。家族は高齢を気遣って「やめたら」と言う。「今年はやめようと思ったけど、年賀状で頼まれて」と続けている。体は元気で、重たい原木を運ぶのも苦にならない様子。

（平成元年6月30日）

ふるさとを創る
愛媛の商工会めぐり・面河村商工会

観光・特産品で村おこし

若者塾開き活動　人材育成目指す

渓谷美と紅葉を誇る面河渓、西日本の最高峰石鎚山へドライブできる石鎚スカイラインがあり、年間約四十五万人の観光客を集める上浮穴郡面河村。しかし、主産業の林業はこのところ不振であり、若者の流出によって人口は千二百人台になり、過疎化が進むのが悩みの種である。

そんな中で面河村商工会が中心になって、村おこしと人材育成を目指して「ふるさと創生塾」が続けられている。株式会社ソフト（松山市）の出雲神吉氏を講師に昨年十一月から続けており、近く十回目の会がある。塾には商工会青年部の会員を中心に役場職員らも参加。多い時は八十人になった時もあった。一年計画で十一月に十二回目の会を開いて終了する予定。

これまで、村おこしとは、ふるさと創生とは、面河村での生きがい働きがいの現状、面河村で誇れるものは、人生設計とは――などのテーマで話し合いが持たれた。次回と最終回で、村おこしのマスタープランを出席者が持ち寄り、「創生企画書」を作成する。この企画書を今後の村づくりに役立てることにしている。

また、今年度の「村おこし」事業の対象地域に指定され、商工会が中心になって特産品の開発、観光開発へのアイデア募集などを行っている。特産品としては現在、マイタケ、プラムが順調。プラムは五年前に特産品の産地育成計画の認定を受けて、特産地化を目指してきたもの。今年は出荷量が足りないほどの引っ張りだこだった。

村おこしの特産品づくりとしては、面河の気候、自然を生かした高冷地野菜、山草、キノコ、魚を利用した二・五次産品の開発を目指す。

観光開発については、「面河渓、石鎚スカイライン以外の場所をどう開発するかです」と松本久夫会長。「観光客の面河村での滞留時間を長くするために」面河ダム周辺や鼓ケ滝、カツラの古木のある大成地区などの開発も考えられる。ダム周辺では、温泉開発やスケートリンクの構想も浮上しているようだ。ダム建設中に鉱泉が発見されており、地元有志によって近く鉱泉探しが始まる。

そのほか商工会の活動として、村のイベント支援も行っており、八月の納涼祭り、十月に面河渓で行う清流郷まつり、十一月の面河村ふるさと祭りなどに商工会青年部が出店などを出し盛り上げを図っている。

（平成元年9月5日）

「村おこし」事業の中心となっている面河村商工会

面河ダム湖畔に温泉

地元民宿業者ら掘り当てる

上浮穴郡面河村笠方の面河ダム湖畔で、このほど温泉法上の「温泉」成分を有する冷鉱泉が見つかった。過疎に悩む同村は、風光明美な面河ダムの観光開発による活性化を目指しており、温泉ブームのなかで関係者は「湖畔の温泉」実現に期待を寄せている。

冷鉱泉が発見されたのは面河ダム北岸の笠方市口地区で、湖から約六百㍍の山すそ。同村渋草、民宿経営松本久夫さん（六四）と同大味川、建設業西岡和夫さん（五四）が温泉掘削をしていたところ、地下四百六㍍付近で鉱泉の水脈を見つけた。鉱泉を県立衛生研究所に送り「温泉水予試験」として分析した結果、固形成分やフッ素イオン、メタほう酸などが、温泉法上の「温泉」とされる基準値を満たしていた。水温は泉源が二七度、地上で二七～二〇度。

昭和三十年代のダム建設に伴う導水トンネル掘削中に「温泉が出た」との付近住民の証言をもとに、今月上旬に分析結果を受け取った松本さんらは、湧出（ゆうしゅつ）量を上げるため、さらに五十㍍掘り下げてから、検査官が現地に出向く本試験を受ける。

温泉として実用化するためには、本試験をクリア後、動力（ポンプ）設置許可、温泉利用許可を知事から受けなければならず、まだ関門は残っている。だが、松本さんらは既に湖畔に温泉施設用地も準備しており「できれば来年にも温泉保養センターをオープンさせたい。地元の人の雇用の場になれば」と話している。

（平成2年6月21日）

温泉が見つかった面河ダム湖畔のボーリング現場

おめでとう百歳

面河村で村制記念式典

上浮穴郡面河村の村制百周年記念式典が十一月十一日、同村住民センターで開かれ、功労者の表彰などが行われた。

面河村は明治二十二年の市町村制施行に伴い、翌二十三年に柚川村として誕生。面河渓が国の名勝に選ばれたのを記念して昭和九年面河村に改称した。同二十四年には約五千人の人口があったが現在は千二百人余に減り、過疎化が進んでいる。

式典には村内外の関係者約二百人が出席。中川村長が「先人の努力のおかげで立派な村有林があり、村の財政の安定に貢献している。今後も力を合わせ、村を守っていきたい」とあいさつ。功労者を表彰した。

（平成元年11月12日）

面河村で開かれた村制百周年記念式典

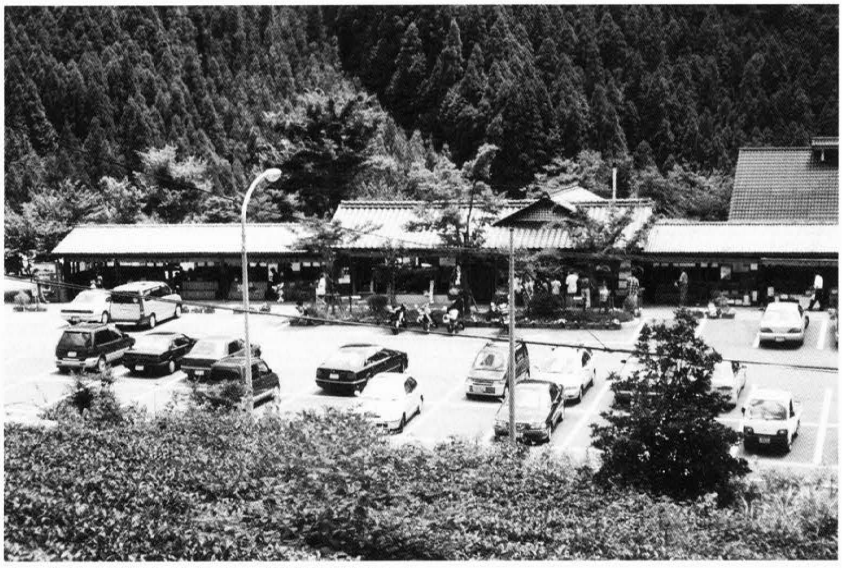
山里の特産品いかが

面河開発センターがオープン

山里ならではの特産品を開発し、販売する「面河特産品開発センター」（菅努所長）がこのほど、上浮穴郡面河村相の木の県道沿いに完成し、五月一日から売店などをオープンする。

農林水産物の加工品や工芸品の見直しと新製品の開発が狙い。ふるさと創生事業として昨年十月着工、今年三月末完成した。建物は、渓谷沿いに落ち着いた雰囲気を漂わせた瓦ぶき木造平屋建て約四百五十平方メートル。漬物、総菜、菓子、麺類（めんるい）、コンニャク、豆腐、ヨモギ粉末、瓶詰の各加工室と研修室、売店、ふるさと市場を備える。総事業費約九千万円。同村では、施設を地元婦人会や農業者などに開放し、運営していく。

（平成5年4月29日）


オープン後、観光客でにぎわう面河特産品開発センター

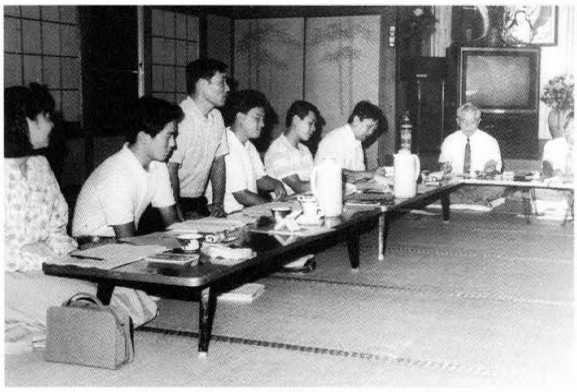
面河を「もみじの里」に

村おこし若手グループ　講師招き学習会

上浮穴郡面河村の若手村おこしグループ「平成おもご塾」（中川直彦塾長、十七人）の第一回ふるさとコンサルティング事業が八月二十九、三十の両日、同村若山のホテルなどであり、塾生十二人が県内外の講師の助言を受け、「もみじの里」づくりを目指すことにした。

同塾は、県の肝いりで平成二年末にできた村のふるさと創生若者塾が発展的に改組。二十三～四十四歳の役場職員、教員、建設会社員らが月例会を開き、村の活性化策を模索している。同コンサルティング事業は、県まちづくり総合センターの地域づくりグループ支援事業の一環。

（平成4年9月1日）



自己紹介する平成おもご塾生ら

広田村と面河村が交流会

上浮穴郡面河村と伊予郡広田村の両役場挙げての第二回職員交流会が二月二十七日、広田村であり、両村全職員の八割近い約八十人が村づくりについて意見交換した。

両村は人口が共に二千人余りで、立地条件や主産業、過疎・高齢化の悩みも類似している。九一（平成三）年秋に三好晃二村長以下広田村職員の大半が面河渓を訪ね、中川鬼子太郎面河村長の講演を聞いたことがきっかけとなり、職員交流研修の話がまとまった。

二十七日、面河村から中川村長以下三十六人が広田村を訪問。まず、山村留学の成功で知られる高市小学校（三十二人）を見学。続いて権現山や神の森、仙波ケ嶽などの整備状況を視察した。

（平成5年2月28日）

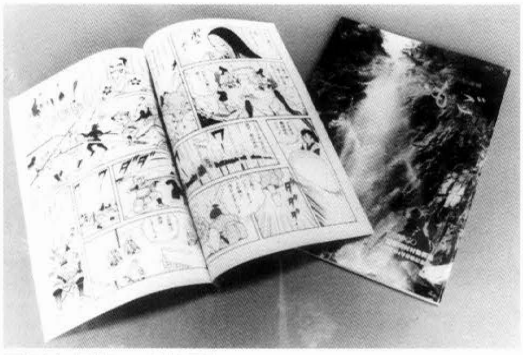
広田村山村留学センターを見学した面河村職員ら

5年ぶり要覧改訂

上浮穴郡面河村は、村内を縦断する県道須崎―松山線が昨年三月国道昇格、今年四月供用を開始したのを記念し、国道494号昇格記念号として、このほど新しい村勢要覧「おもご」（A4判、七十二ページ）を刊行した。五年ぶりに改訂した要覧を千冊印刷し、同村全戸と近隣自治体に無料配布する。

今回の要覧は、「マンガで見る面河の歴史」がフレッシュ。同村ゆかりの猿飛佐助、行者、石鎚の天狗を登場させ、子供にも分かりやすく村勢を紹介している。国道昇格の経過報告の後、天狗岳や大成にある樹齢千五百年のカツラの大木、面河渓、この春に三段瀑と確認された御来光の滝などがカラー写真で美しく掲載されている。

（平成5年6月1日）



面河村が刊行した村勢要覧

自然の宝庫ならでは

山岳博物館　来月1日から一般公開

石鎚や面河の二万点に上る動植物、鉱物を展示する面河山岳博物館が上浮穴郡面河村若山の面河渓入り口に完成、三月十九日、村関係者ら約百五十人が出席して開館記念式典が行われた。一般公開は四月一日から。

観光立村を掲げる面河村は、年間五十万人近い観光客が訪れる景勝地面河渓に滞留型の施設をつくろうと、四億七千三百万円をかけて同館を建設。鉄筋三階建て千七百平方メートルの建物は、昨年六月落成、楠博幸元県立博物館副館長（六八）を中心に展示物の収集が進められていた。

二階展示室は、石鎚山系の自然がテーマ。パネルを使って、四千万年前の石鎚の姿から説き起こし、地質的な成り立ちを分かりやすく解説しているほか、化石、鉱物、昆虫、魚など三千種類を展示。

三階展示室は、中央に二万分の一の石鎚の模型が配置され、お山開きの様子をパノラマ化。石鎚山の山岳信仰や登山史、山村面河の暮らしなどに関連した資料も集められている。このほか三階には、約五百冊の石鎚関係図書閲覧室があり、特別展示をする研修視聴覚室では、「面河石鎚春の自然展」が、五月二十六日まで開かれている。

（平成3年3月21日）

面河渓入り口に完成した面河山岳博物館

面河・石鎚の自然一目で

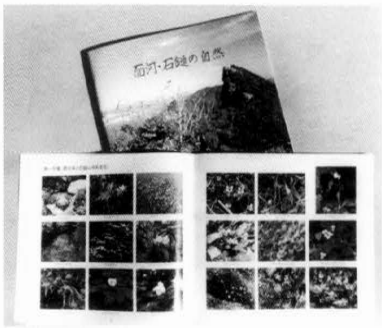
山岳博物館がガイドブック発刊

上浮穴郡面河村の面河山岳博物館が、このほど自然観察ガイドブック「面河・石鎚の自然」（B5変形判、フルカラー四一ページ、五百円）を発刊した。

同書は面河村の地形・地質や石鎚山の動植物などを多数のカラー写真と平易な文章で説明。面河渓や土小屋、石鎚山頂など地点別に森林の解説があるほか、イシヅチザクラなどの地元原産植物をはじめ、季節ごとに八～二十種類の草花をカラーで紹介、花暦も付けている。動物もほ乳類、コマドリなどの野鳥、アマゴなど魚類、両生類、昆虫を網羅。鳥のさえずりを文字化して識別しやすくするなど工夫している。

執筆は、森川国康松山東雲短大学長や松井宏光同短大助教授、鹿島愛彦愛媛大教授、楠博幸南日本自然史研究所長ら石鎚の自然研究に実績を持つ専門家が担当した。

（平成4年1月26日）



面河山岳博物館が発刊した「面河・石鎚の自然」

文字通り便利です

「もみじの里面河べんりマップ」おもご塾が作製

上浮穴郡面河村の村おこしグループ「平成おもご塾」（中川直彦塾長）が、このほど「もみじの里面河べんりマップ」（二十六×五十センチ、四つ折り）を作り、訪れた観光客から重宝がられている。

マップ作りは観光客から「村内の観光が複雑で分かりにくい」などの苦情もあり、一年前から取り組んでいた。マップは表を面河渓谷と笹倉湿原のカラー写真で飾り、同村の各種イベントが紹介されている。裏側はイラストで皿ケ嶺自然公園や面河ダム、石鎚国定公園などの観光名所が地図に表示され、複雑な道路の分岐点をピックアップし、分かりやすくしている。各登山ルートの距離と所用時間やキャンプ場、国民宿舎などの観光施設が案内され、主要公共施設も四十八カ所が番号で探せる。五千部印刷。観光施設に無料で置いている。

（平成5年7月18日）

平成おもご塾が作った「もみじの里面河べんりマップ」

本県4例目面河で発見

珍種ウスキキヌガサタケ

網目の黄色い傘をかぶったキノコの珍種、ウスキキヌガサタケがこのほど、上浮穴郡面河村で見つかった。四国で五例、県内では平成元年に温泉郡重信町で三例発見されて以来の四例目で、再び植物愛好者の話題を集めた。

見つけたのは同村中組、左官業青木武彦さん（五二）。九月五日午前中、面河川に接した倉庫裏庭の手入れをしていて、山草の鉢の間に生えていた。

高さは十五センチ、茶色の頭から傘に当たる部分は、黄色い網目模様で直径十二センチに広がっていた。一日でしおれた。

「マントを羽織ったような美しいキノコだった。長年、住んでいるがこのようなキノコを見たのは初めて」と青木さん。近くの面河山岳博物館を通じ、キノコに詳しい日本菌床学会会員の沖野登美雄さん（五七）＝伊予郡砥部町＝に連絡した。

（平成5年9月29日）

面河村で見つかったキノコの珍種
ウスキキヌガサタケ

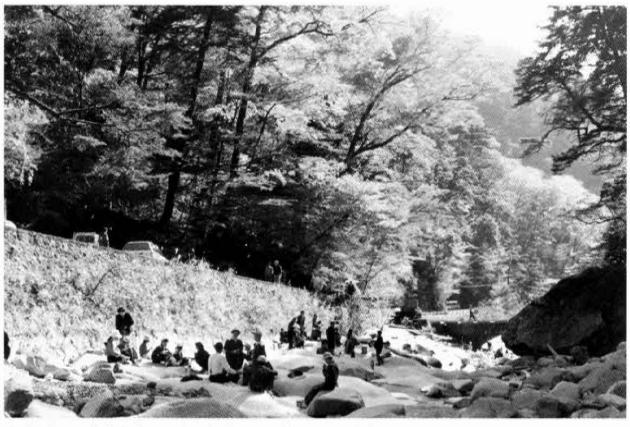
自然が織りなす色彩のハーモニー

秋は一日ごとに深まりをみせ、紅葉前線も山里まで下りてきた。紅葉の名所、上浮穴郡面河村の名勝面河渓は紅葉の盛りも目前だ。

渓谷の入り口、関門は奇岩と渓流の景勝地で、遊歩道から見上げる断崖（だんがい）の木々も色づいている。渓谷の表玄関ともいうべき五色河原付近は家族連れやグループが弁当を広げたり、渓流釣りに興じている姿も見られる。

渓谷の遊歩道沿いに蓬莱渓、紅葉河原などの見所が続き、赤く色づいた紅葉や黄葉した広葉樹が色彩のハーモニーを織りなしている。

（平成元年11月2日）


紅葉狩りや渓流釣りの観光客でにぎわう面河渓